



PDF
同梱

ノベル付CG17枚+
文字無差分16枚入り!

激突!!

土女村尼入道!!

ふたなりショートノベルCG集

激突!! 土女対尼入道!!



「ひっ…ひい…っ」

オレは今自室でとんでもないピンチに陥っていた。

ベッドで寝転がっていたオレに覆いかぶさるように妖怪が現れたのだ。

「フェツフエ、貴様がお前殿か。なんともかわいい奴、わしが嫁(?)にもらい受ける」

「お、おい…だ…誰か…!! 誰かいないのか!」

「お前ちゃん、お夕飯の時間ですよ……」

戸を開けてオレを呼びに来たのは美土緑だった。

やった、助かった……。オレは安堵したが……

「あら、お楽しみ中だったのね。ごめんなさいね。」

戸を閉め部屋を出ようとする美土緑をオレは叫んで止めた。

「ち、違うよ、美土緑お姉ちゃん!! 襲われてんだよ、オレは!!」

「あら、そうでしたの。わたしくてつきりデリヘル嬢をご注文されたのかと」

「こんなヤバそうなデリヘル嬢がいるか!!」

「フェツフエ、あんたも妖のようだねえ……」

ツカツカと美土緑に寄っていく妖怪の女。

「わしは尼入道の尼莉(あまり)。お前殿はわしがもらっていく」

「困りましたわ、お前ちゃんはわたくしの大切な家族ですの」

「そうかい、ならばあんたを殺していただくのでしょうか!」

「争いごとはあまり好きではありませんが、お相手仕りますわ」

そういうとなぜか二人とも服を脱ぎ、股間からおちんちんを露出させた。

「ちょ! なんでもかわいいおちんちん出しちゃってるんですか!」

「あら? これが妖の戦いなのよ。今まで見てきたでしよう? 美冷ちゃんや炎美ちゃんの戦いを」

「そ、そういうばなせかそっちの戦いになってたな」

「フェツフエ、これで精が切れた方が負け、言わば死んだも同然という事よ」

「な、なるほど、そういう事ならどうぞ」

かくして、土女と尼入道による妖怪決闘が幕を開けた。

尼莉はチンポを美土緑のおちんちんに絡みつかせるとズイッと顔を美土緑の顔に近づけ、メンチを切っていた。それに対して笑顔で返す美土緑。

「何をニコニコしとるんじゃ!」

腰をクイクイッと動かし、チンポを擦り付ける尼莉。

おお…これは手を使わずに擦り付けただけでやる兜合わせ対決か!!

萌える、萌えるぞお♡オレは二人が真剣に戦っている横で

つついっせいセズリをコいでしまった。

「あんっ…♡すごいですわ、熱くて硬い…♡」

「んっ…♡き、貴様の黒いチンポもなかなか…♡」



「んふふっ……♡次はこちらから行かせていただきますわ♡」
そういうと美土緑は腰を上下に振り、チンポをペチペチと叩きつけた。
叩きつけた衝撃により、二人のチンポはブルンブルン揺れていた。
「あんっ……♡なんという硬さ……♡」
「んふふっ♡ブルンブルン揺れてかわいいですわ♡」
ペチペチ叩きつけていると二人のチンポの先からはガマン汁が垂れてきていた。
「あら、尼莉さん、おちんちんからヨダレが垂れていますわ、はしたない♡」
「な、なにを……♡貴様もではないか……♡はあ……♡あっ……♡」



二人がチンポを絡ませているうちにガマン汁が全体にいきわたり、ヌメヌメと光沢を放っていた。擦り付けるたびにヌルヌルと非常に気持ちよさそうに擦りあわされていた。

「んふっ♡尼莉さんそろそろイキそうですね♡おちんちんぴくぴくしてますわよ♡」

「き…貴様の方こそはちきれんばかりにチンポが勃起しておるぞ…♡」

「ホラホラ♡先っぽがもう限界じゃありません事♡」

そういうと自身のキンタマで尼莉のチンポの先っぽを抜き始めた。

「ひうつ♡先っぽダメえ♡」

びゅっ!!ぶびゅうつ!!びゅびゅっ!!

「あっ♡き、キンタマにいつぱい…あんっ♡」

びゅるるっ!!ぶびゅ!!ぶびゅっ!!



「お、おのれ…♡こ、こうなったら力づくで貴様を殺す!!」
尼莉を見ているとみるみる尼莉の首が伸びていった。

「な、なんだ!? ろくろ首って奴か!」

「フェツフェ、違うな。わしは見られておると首がどんどん伸びていくのだ。それが尼入道よ!」
尼莉の首が美土緑の首に巻き付こうと迫る。

しかし、美土緑はその首をつかむと顔面にエルボーをたたき込んだ。

「ぐえっ!」

強い衝撃により、尼莉の首は元の長さに戻っていった。

「暴力はいけませんわね、尼莉さん。そういう方にはお仕置きが必要ですわね……」
顔はニコニコ笑っているがどす黒いオーラが背中から出ているのがオレには見えた。





「ふらついている尼莉のバックを取り、左足で相手の左足をホールドし、自分の左手を相手の右脇に入れた。そして脇へ入れた左腕で相手の上体を起こした。」

「ぐあああつ!!」

「尼莉の上半身がキマっている。こ、この形はコブラツイストだ!」

「んふふっ♡さあ、ごめんなさいは?」

「だ、誰が言うか…このクソメスめ…」

「あらあら、口が悪いこと。そういう子には…♡」

「尼莉の股間を弄るとおちんちんを抜き始めた。」

「あっ…♡き、貴様…やめろ…♡」

「んふふっ♡こんなにおつきくして…はしたないおちんちんね♡」



「あっ…やめろ…♡さ…触るな…♡」
「んふふっ…♡それにしても抜くたびに
おちんちんガチガチになってますわ♡」
「ち…ちが…これは…♡」
「抜き続けていると尼莉の亀頭からガマン汁がトロつと溢れてきた。
「あらあら♡先っぽからヨダレが♡スケベなおちんちんですわね♡」
「あんっ…♡や…やめろお…♡」
「ほら、すごい♡ニチニチ音が立ってる、ヤラシイですわね♡」
「美土緑が手を動かすたびにヤラシイガマン汁の絡みつく音が
ニチニチと響いていた。」



「うあああっ…♡やめろお…し…抜くなあ…♡」
「んふふ♡おちんちんもガチガチになって喜んでますわよ♡」
「そ…そんなことない…あっ…ダメえ…
で…出る…精子出ちゃう…♡」
「いいですよ、そのままいっぱい出して♡」
「そういうと抜く速度が上がり、
尼莉のチンポを絶頂へと導いていった。
「あっ…♡ダメえ!!イクイクッ!!」
びゅっ!!ぶびゅっ!!ぶびゅっ!!
張り詰めた亀頭から勢いよく精液が舞った。」



「んふふっ、尼莉さん、ごめんなさいは？」
「はあ…はあ…♡ゆ…許さんぞ…貴様…♡」
「あらあら、まだお仕置きが足りないようですね。じゃあ…♡」
美土緑はそういうと、尼莉の上半を下へ向け、そのまま逆さに
抱え上げると、頭を自身の太ももと太ももの間に打ち付けた。

「うおっ!!すげえ!!パイルドライバーだ!!」
「オレは思わず叫んでいた。」
「うあああっ!!やめろ!!離せえ!!」
「んふふっ、じゃあごめんなさいします?」
「ふ、ふざけるなあ!!誰がお前のようなクソ女に謝るかあ!!」
「じゃあ、仕方ありませんわ♡」
「そういうと顔の近くにあった尼莉のチンポをしゃぶり始めた。」
「んあああっ♡や、やめろ!!舐めるなあ!!」
「んふふっ、汗ばんで美味しいおちんちん♡」



ジュポジュポと音を立ててやらしくしゃぶる美土緑。
チンポの先の方は美土緑のツバと尼莉のガマン汁でヌレヌレだった。
「んふふっ…♡先っぽヌレヌレですよお♡」
「やめろお…♡な…なめるなあ…♡」
「んふふっ、このカリ首なんかすぐくエッチ♡」
ペロペロと舌を使って尼莉のカリ首を入念に舐める美土緑。
「ひいっ♡カリ首舐めちゃダメえ♡」





「あああっ♡やめろお♡カリ首弱いのお♡」
「あら、そうでしたの♡じゃあ、もっと入念にペロペロしてあげますわ♡」
「龟头を口に含むと口の中でペロペロと舌がカリ首に絡みついた。」
「ひうっ♡そ、そんなにされたら出ちゃうからああ♡」
「何が出ちゃうんですかあ？」
「お、おチンポ汁う♡精子いっぱい出ちゃうからあ♡」
「んふふっ♡じゃあ、いっぱい出しちゃいましょうねえ♡」
「下の動きが激しさを増す。そしてついに張り付けていた尼莉のおちんちんは限界を迎えた。」
「んひっ♡イクイクッ!!出ちゃうう!!」
「ぶっ!!びゅる!!びゅびゅっ!!」

「はああ♥すごく濃いですわ、尼莉さんの子種♥」
美土緑に口から尼莉の精液がドロツと垂れていた。

「はっ…はああ♥あっ…あっ…♥」

「んふふっ、そろそろごめんなさいします？」

「い、いやだ…お前なんかにするかい…!!」

「あらあら、気丈なお方ね♥でも、そろそろおしまいになさっていただきますわ♥」
そういつて、美土緑は尼莉の太ももを持って体を抱え上げた。



「んふふっ♡最後はケツマンコしましょうねえ♡」

「ひっ!!やめろお!!離せえ!!」

必死でもがく尼莉だが、美土緑のすさまじい力の前には無意味であった。

「んっ…♡ヤラシイケツマンコですわね…♡挿入れますわよ♡」

「や、やめろお!!」

抵抗する尼莉だったが、美土緑のチンポはにゅるっとすんなり

ケツマンコへと入っていった。

「んあああああっ♡」

「んふっ♡すごい締めまり…♡ヤラシイ…♡」

ゆっくりと腰を動かす美土緑。



「ふっ♡ふっ♡んふふっ…♡すごいヤラシイおまんこですわね
キュッキュ締まりますわ♡」

「あっ♡あああああ♡やだあ♡おまんこやだあ♡」
「んふふっ♡かわいい♡」

ホラホラ、ピストンするたびにおちんちん揺れちゃつてる♡」
尼莉のチンポはピストンされるたびにぶるんぶるん揺れていた。
先っぽから溢れてきたガマン汁も揺られていた。



「あんっ…♡そろそろ出ちやいそうですわ♡
尻腔内に出しますわね、わたしくの子種を受けて妊娠なさってね♡」
「ああああっ♡やめろお!!やだ!!腔内に出さないでえ♡」
「激しさを増すピストン運動。パンパンと音が鳴り響いていた。」
「んっ…んっ…♡出しますわよ…♡イクッ…♡」
「ぶっ!!ぶびい!!ぶびゅっ!!」
「んあああああああ♡♡♡♡♡」



「ご……ごめんなさいい……♡も、もうしませんから、許してえ……♡」
涙ながらに謝罪する尼莉。そんな尼莉をぎゅっと美土緑が抱きしめた。
「尼莉ちゃん、えらいですねえ。ごめんなさい言えましたねえ。
じゃああつちでみんなでご飯食べましょうか。
お前ちゃんも冷めないうちに早く来てくださいね♡」
「う……うん……」
美土緑に連れられ出ていく尼莉を呆気にとられながら見送るオレだった。

「な、なんか最後まで子ども扱いだったな。」

それよりも、今日の戦いを見ていいことを思いついた。名付けて妖怪プロレス！
妖怪の女たちによる戦いだ！これはいい興業になる！」
机に向かい、思いついた名案を早速詳細に構想するオレだった。

激突!! 土女対尼入道!! 完